

私が教師になった理由(わけ)

さだまさしの楽曲に「いのちの理由」という曲がある。「私が生まれてきたわけは」で始まり、それを10回繰り返すのだが、その曲を聴くたびに私自身が生まれてきたわけを考えてしまう。そして、それは、いつの間にか「私が教師になったわけ」になる。

7月のことだった。教室いっぱいの70人を超える教師志望の学生からの質問に応じた。その大学の教授が、講義のテキストとして拙著を使ってくださったのだが、著者に尋ねたいことがあるという学生がいたことから行ったことである。私は、1時間半にわたって、尋ねられたことに応じたのだが、そのうちの一人の学生が、「石井先生の教師になろうという思いは、どこから生まれたのですか」という質問をしてきた。質問をしてきた若々しい学生の顔を見てハッと浮かんだのは、教員志望者が減少しているという昨今の実情だった。もしかすると、この人は、今、教師になるべきかどうか思案しているのかもしれない。これは誠意をもって答えなければならない、瞬間的に私の脳裏にそういう思いが走った。

1 小学校時代に出会った“先生”によって

私の「教師になりたい」という思いは、小学校を卒業する頃には明確になっていた。私の家系に学校の教師はいない。だから、親や家族の影響を受けたということは全くない。

私の父は、私が生まれて百日で出兵しそのまま帰ってこなかった。戦死の広報が届いたのが戦後3年もたってからだったのは生死不明状態だったからである。そのため、母は実家に戻ることをせず、父の帰還を待ち続けていたのだろう。

父のいない私の家は、さまざまな食料品を扱う田舎の小さな今でいうスーパーだった。母は祖父とともにその店のきりもりをしていた。それは大変な忙しさだった。だから、幼児の私は、自然と、一人で遊んでいたようである。唯一、相手をしてくれたのは祖母だったが、その温かさを感じつついつも寂しさと隣り合わせの日々だったと思う。

小学校1年生、担任は女性の先生だった。70年以上も前のことなのでよくは覚えていないのだが、一つだけ今でも記憶に残っていることがある。それは、同じ学級の何人かと、先生の自宅に招いていただいたことである。私にとって、先生の家に行くという出来事は非日常のものであり、うれしくてならなかったにちがいない。

その16年後、私は小学校の教師になるのだが、その最初に担任した11人の子どもを、夏休み、生家まで連れてきて宿泊までさせている。学校のある村から私の生家までは、汽車で2時間半もかかるのにそうしたのは、1年生のときに招いてもらったうれしさと無縁ではなかったのだと思う。

5年生の先生と6年生の先生は、私にとって両極端だった。5年生の先生はいつも面白い話をしてくれた記憶がある。私はその先生が好きだった。それに対して6年生の先生は怖かった。体育の時間、何が原因だったか覚えていないが、一人の子どもが私たちの目の前で信じられない叱られ方をした。そのとき、私は、自分が教師だったら決してこんな叱り方はしない、そう思った。そんな昔のことを未だに覚えているのだからそれほどこの時のことは印象的だったのだろう。しかし、今になって思うと、それはすでにそのとき、教師になろうという意識が芽生えていたことを示している。

私にそういう意識が芽生えさせたのはここまで記した先生たちではない。私に強い影響を与えてくださったもう一人の先生がおられたのだ。それは、私の入学から卒業まで、ずっとその学校の校長だった先生である。

校長先生のご自宅は私の住む地区にあった。私の家から小学校までは1.5kmほどあったが、先生の家はそれよりやや遠くにあった。ある日、どういうことが原因だったか分からないが、集団登校に間に合わず遅刻しそうになったことがある。そのとき、母は、私を自転車の荷台に乗せて学校まで送ってくれたのだが、そんな母の自転車をすうっと自転車で追い越し、「遅うなったんか、順ちゃん。大丈夫、間に合うよ。お母さんにお礼、言うとき」と声をかけてくれたのが校長先生だった。校長先生は、父のいない私のことをいつも案じてくださっていたのだった。

校長先生のことでもう一つ鮮明な記憶がある。私の家のすぐ近くに神社がある。その神社で「山の神」という行事があった。子どもの成長を願う行事である。6年生になっていた私は、いちばん年上の子どもとして、どういう行事にするか考えなければならなかった。そのとき、「せめて昼から学校が休みだったらええのに」という声が出てきた。6年生としての責任を感じた私は、校長先生がああ優しい先生だという甘えの気持ちが芽生えこともあり、自分たちの地区だけ昼から帰らせてもらえるよう頼みに校長室に出かけたのだった。

校長先生は、私の話を最後まで聞いてくださった。しかし、その答えは「ノー」だった。その理由は、一つの地区だけ特別にすることはできないというまっとうなものだった。そのときにおっしゃった先生の一言が私にはこたえた。「ここ(校長室)に来るまでに、順ちゃんがそのことに気づかなかったとはなあ！ もうちょっと賢くならなあかんあ！」

校長先生は、父のいない私のことを案じ、それでいてきりっと叱ってくださった。学校の先生とは、子どもにとってなくてはならない存在なのだ。子どもを見守り、子どもの心に寄り添い、子どもの成長にかかわる、そういう存在なのだ。そのとき私はそう感じたにちがいない。だから、この出来事が私の「学校の先生になりたい」という思いを確かなものにしてくれたのだった。

こうして私は、教員養成大学の門をくぐることとなった。そして、小さな漁村の僻地校の教師となり、前述したように、その最初の子どもを自分の生家まで連れてきたのだった。その契機を開いて

くださった校長先生とのことでさらにもう一つ書いておきたいことがある。

初任の学校が決まったとき、私は、小学校時代の校長先生にそのことを報告に行っている。そして、その後も、年に一度はどんな教員生活を送っているか報告に出かけている。

その校長先生が病の床につかれたという知らせが届き、お見舞いに出かけたときのことである。私は、子どもたちにこういう作文を書かせているという話をした。すると、校長先生はそのことに強い興味を抱いてくださった。今、思うと、そこに、子どもと教師の寄り添いとつながりを感じられたのだと思う。それが証拠に、学校に戻った私のところに、校長先生からお手紙が届き、その中に、子どもたちの作文をもとにした一人ひとりの子どもに対する手紙まで同封されていたのだ。

私は、さっそく子どもたちにそのお手紙を読んで聞かせた。すると、子どもたちは、そのお手紙に返事を書きたいと言う。こうして、私の小学校時代の校長先生と私の学級の子どもたちとの手紙によるやりとりが始まったのである。

翌年、6年生に進級した子どもたちが修学旅行に出かけることになった。その道中、列車が、私の生家のある町、つまり校長先生のいらっしゃる町を通過する。その駅に、校長先生が病をおして来てくださったのである。駅に停車するわずかな時間の校長先生と子どもたちとの対面、それは私には感動的なものだった。しかし、それからしばらく後、校長先生は生涯を終えられた。校長先生は、最後のさいごまで、教師のあるべき姿を私に見せてくださったのだった。

私の教師としての原点、それは私の小学校時代にある。人は何と出会うか、だれと出会うか、すべては「出会い」によって決まる。私が教師の世界にいざなわれたのは、「自分と子どもとの出会い」への憧れを抱いたからではないか、そう思っている。

2 子どもとの出会いを大切にする教師に

ある人から届いたメールの中に書かれた言葉、その内容のうれしさが、今、私を幸せにしている。それは、「どこまでも一人を大切にする姿に私の目指す教師像がある」「ずっと出会いたかった」というものだった。

もちろん、私がこのメールに書かれているようにできているとは思わないし、私の授業を見るまなざしがそうなっていると自惚れるつもりもない。逆に「どこまでも一人を大切にする」ことの難しさを感じているつもりである。けれど、そうしたい、それができる教師でありたい、という思いは、だれにも負けないほど抱いていると思っている。

その思いに共感してくれる人がいる、そういう人と出会えた。それがうれしいのだ。

冒頭、教師志望者が減少していると述べた。それは事実だろう。けれど、その一方で、このメールのように書いてくれる人がいるのだ。教師になりたいと思うだけでなく、「どこまでも一人を大切にする教師」になりたいと願う人がいるのだ。

子どもとの出会いを大切にする教師は、もちろん私だけではない。類は友を呼ぶと言うけれど、私の周りには、そのような思いを抱いて日々子どもに向き合っている教師がたくさんいる。

席に10分と座っていられなくて、教室をあちこちと動き回ったり、廊下に出ていったりする子どもに心を寄せ、話しかけ、ともに遊び、授業の内容が分からないと言えばそばに行ったり、一緒に考えてくれる友だちとつないでやる、そういうことをやり続けた教師がいる。半年後、彼の教室を訪れ、その子どもが席についてペアの友だちと一緒に学んでいる姿を見て、私は、その教師に「やったね！」という合図を送ったのだが、その合図にこやかに応じたその教師の表情が忘れられない。

このような席に座ってられない子どもが増えている、そう言われるようになって久しい。座ってられない子どもがいると、教室が落ち着かなくなるので、苦慮している先生は多い。そんななか、そういう子どもに寄り添い続けている教師に出会った。1時間授業を参観したのだが、驚くべきことに、そのうちの半分の時間その先生はその子を抱っこして授業をしていたのである。そして、特筆すべきは、抱っこしていなかった残りの時間、その子は、他の子どもたちと一緒に学んでいたのである。私は思った、参観したのは6月だったから、この年度の終わりになったころには、もっと長い時間他の子どもたちとともに学べるようになっていないと。この子には、抱っこして自分を迎え入れてくれる先生がいる、そのことがこの子どもの安心感になり、その先生がいるこの教室では、先生から離れてでも過ごすことができるようになるのだと。

子どもには、居場所や拠り所が必要なのだ。それがあれば気持ちは安定する。それがないと、子どもの心は不安定になり、それが子どもの心や行動に影響を与える。だから、教師は教室をそういう居場所にするために心を砕かなければならないし、場合によっては、教師こそが子どもの拠り所にならなければいけない。

このことは、今の時代だから起こっていることではない。古今東西、いつの時代、どこの学校でも、大なり小なりそういうことは存在していたのだ。

私が青年教師？であった頃、発売されたばかりの児童文学書に『兎の眼』（現・角川つばさ文庫）という長編があった。物語の主人公は小谷先生という若い女の先生だが、その先生の先輩教師として足立先生と言う人が登場する。詳しいいきさつは省略するが、困窮する家庭状況の中、一人の子どもがよくない行動をするのだが、そこに駆けつけた足立先生がその子に対応した後、小谷先生にこうつぶやく場面がある。「(あの子は)悪いことをしたと思ってあやまっているわけやあらへん。すきな先生がきて、なんやら、やめなさいというてるらしい。地球の上でたったひとりかふたり残ったすきな人がやめとけというてる、しゃーないワ。(あの子の)気持ちはそんなとこやろ」

子どもを指導するのが教師だが、現象面だけ、起こった出来事だけ、事の善悪だけを取り上げて子どもの心を揺り動かすことはできない、大切なのは、子どもとの信頼関係なのだ。『兎の眼』は、そのことを私に示してくれている、そう思って私は、むさぼり読んだ。自分が読むだけでは事足りず、長編の物語を、朝の始業時のわずかな時間を割いて、テレビの連続ドラマのように毎日子どもたちに読み聞かせた。そのことによって、私の中に息づいている「子どもに寄り添う教師像」はさらに確かなものになっていったのだ。

後に、私は、『兎の眼』の作者の灰谷健次郎さんと親しくなり、灰谷さんが私の教室を訪れ、「やさしさについて」というテーマの授業までしてくれることになったのだった。

この頃、ある出版社から「子どもからのメッセージ」という表題の執筆依頼を受けて記した文章がある。そこに、私の原点となっている「一人の子どもも独りにしない」という教師像が、灰谷さんとの出会いでさらに深くなったことが表れているので(一部修正して)ここに再掲することにする。

わたしの学級に、養護施設から通っている安田君(以下、名前はすべて仮名)という男の子がいます。いたずらっ子だけど、なんとも目の涼しい子です。

五年生も終わりに近づいた三月のはじめ。子どもたちのいちばん近い存在である「お母さん」を見つめて作文を書いてもらうことになりました。わたしの学校では、社会科なり作文なりで母のことが出てくると、養護施設の子どもたちには、施設の保母さんのことをお母さんとして考えさせていますし、現にわたしもそうしてきたのでした。

しかし、今度の作文ではそうしたくありませんでした。どんなにつらいことであっても、安田君はお母さんがいないということを背負って生きていかなければならないのだから、やはりごまかしてすませるべきではないと考えたからでした。それに、そういう安田君のつらさを受けとめることができるまでに、わたしの学級の子どもたちも成長してきているという思いがあったからでした。

ある子どもが、そんな作文への取り組みの中で、次のようなことを日記に書いてくれました。

やす田君

北山 みどり

国語の授業でした。自分のお母さんの作文を書くのに取材したことをしました。

そのと中、先生がやすだ君のことを言いました。

「やす田くんは、みんなが知っとるように、お母さんおらん。だから、お母さんの作文が書けやんな。だから、先生と話し合ったんやわ。そんで、やす田くんは、お母さんの思い出を書くことにしたんや。それで、こんなに(お母さんのことを)集めてきたんやぞ。」

と言って、取材カードをみんなに見せました。

そしたら、お母さんのことを思い出したんかしらんけど、顔が赤くなって泣き出しました。今までなかなか泣かないで元気だったやす田くんが泣き出しました。それほどショックをうけたんだと思いました。なんか、やす田くんが泣いていると、わたしまで少しなみだぐみそうになってきました。小田さんも目からもうすぐあふれそうでした。後ろにならんでいた牧野先生も泣きそうでした。

研究授業が終わって六時間目に、『利根川』(註・合唱と朗読により構成したもの)をしました。やす田くんの番がきました。そしたら、自分のセリフを、

「これからも、何百年何千年と。」

と言いました。先生がその時、しきをしながら泣いていました。わたしも感動しました。やす田くんはえらいなあと思いました。いつもにくつらしいことばかりいっているけど、心の中ではショボンとしているんだなあと思いました。親がないのに、お姉さんと二人でがんばってるんだなあと思いました。わたしは、自分がちょっとなさけなく思いました。お母さんにあまえたりして。

三日後、書くことがあまり好きでない安田君が、引き締まった表情で原稿用紙に向かい、時々ため息をついては鉛筆を走らせる姿を見て、またわたしの胸は熱くなるのでした。

そして彼は、『母の思い出』という原稿用紙五枚の作文を書きあげてくれました。わたしは、この作文を読んで、日頃母のことを口にしたことのないもとき（安田君）が、お母さんに対してこれほど深い思いを抱いていたのかと驚いたのでした。

この作文によって、わたしは、はじめて安田君のかなしみに触れたのでした。そして、『利根川』のセリフを言い切った姿と、それ以後の彼の明るさに、安田君のつよさを見たのでした。

3 私が教師になったわけは

さだまさしの「いのちの理由」で、「わたしが生まれてきたわけ」として歌われているのは「人との出会い」である。「友だちみんなに出会うため」「愛しいあなたに出会うため」というように。それなら、わたしは、数えきれないほどの「子どもたちと出会うため」だと言える。

そうなのだ！ 教師は、子どもたちと出会うために教師という職業を選んだのだ。これからの時代を生きる、何人もの子どもたちと出会うために教師になったのだ。

私も、入学から卒業までかかわってくださった校長先生と出会って教師になり、その後、教師としてたくさんの子どもたちと出会ってきたのだ。

ただ、その「出会い」がどのようなものにしたかったか、そこに「わたしが教師になったわけ」があるように思う。

さだの「いのちの理由」では、次のように歌われる。

—— しゃわせになるために 誰もが生まれてきたんだよ
悲しみの花の後からは 喜びの実が実るように
しゃわせになるために 誰もが生きているんだよ
悲しみの海の向こうから 喜びが満ちて来るように

そして、歌い収めは、次の言葉で結ばれている

—— 私が生まれてきたわけは
愛しいあなたを護るため

私にとって「生きる」ということは「教師として子どもの学びをみつめる」ということだった。その見つめ方に、「子どもを見守り、子どもに寄り添う」目線があるようにしたい、そう願い続けてきた。近著『「学び合う学び」を生きる』（ぎょうせい）のサブテーマを「“まなざし”と“内省的実践”がつくる授業」にしたのは、そんな私の願いによる。

私の実践がその願い通りだったかと言えば、反省しなければならないことが多々ある。けれども、その願いだけは持ち続けてきたという矜持だけはある。

いま、私の周りには、私が「護るべき愛しいあなた」がいる。その幸せを大切にしながら、「私が教師になったわけ」を歌い続けていきたいと思う。